

昭和61年度 放流技術開発事業

(放流漁場高度利用技術開発・あわび類)

(要 約)

桐原 慎二・能登谷正浩

下北郡風間浦村を対象にアワビ害敵生物等の出現状況の整理、種苗放流効果の把握及び時期別放流試験を行った。なお、詳細については「昭和61年度 放流技術開発事業(放流漁場高度利用技術開発・あわび類)報告書」(昭和62年3月 青森県)として報告した。

1. 害敵生物の出現状況と駆除

12月4日と10日に時期別放流試験地周辺のエゾアワビ死殻及び底生性の害敵生物を収集した結果、259個の死殻が得られ、これらの状態及びこれらの平均殻長、殻長組成が砕取調査で得られた生貝のものと一致したことから、これらは殻長の大小に関わらず等しく食害を受けたと推察された。害敵生物として得られたヒトデ類は6種であるが、イトマキヒトデ(約3.2個体/m²)が特に多く、この3個体によるアワビの捕食がみられた。また、得られた18個体のミズダコのうち8個体の胃内容を調べたところ、1個体についてアワビの捕食が認められた。

12月5日に下風呂漁協が種苗放流した場所に蛸集し、刺網により捕獲された魚類10種46尾の胃内容を調べたところ、2尾のアイナメによるアワビの捕食が認められた。

2. 時期別放流試験

60年10月18~20日に4,972個体(白色標識1,922個体、黄色標識984個体、青色標識998個体、対照群998個体)のエゾアワビ稚貝(平均殻長22.8mm、平均体重1.5g)に個体標識を貼付した。このうち黄色及び白色(995個体)標識貝を60年11月15日に放流し60年秋放流群とし、このほかについては放流までの期間、風間浦村アワビ増殖センターにて給餌飼育した。

61年度は前年度に放流した黄色標識貝について12月4、9日及び10日の3日間に回収を行い62個体(6.3%)を得たが、これらは標識貼付時から回収までに平均で24.6mm、平均体重で12.3g成長した。標識貝のうち飼育中の青色及び白色(997個体)標識貝を6月19日に放流し61年春放流群とした。

61年11月24~26日に4,986個体(白色標識1,994個体、橙色標識998個体、黄色標識996個体、対照群998個体)のエゾアワビ稚貝(平均殻長22.1mm、平均体重1.6g)に個体標識を貼付し、このうち橙色及び白色(997個体)標識貝を12月9日に61年秋放流群として放流した。放流翌日に食害と害敵生物の蛸集を観察したところ、春の調査ではみられなかったヒトデ類多数の蛸集及び標識貝14個体の死殻が認められた。食害は放流時期別の生残に関わる重要な問題と考えられ今後の標識放流においても同様の調査を行う。黄色及び白色(997個体)標識貝については62年春に放流する予定である。なお、白色標識貝は63年春に、このほかの色の標識貝は放流1年後に各

々回収を行い、生残、成長を比較する予定である。また、対照群とした標識貝については63年春まで給餌飼育しこれを求める予定である。

3. 殻長別放流試験

61年度から殻長の異なるアワビの放流試験を開始した。

12月9日に10mm、20mm及び30mmサイズのエゾアワビ稚貝各々4,000個体、6,000個体及び3,000個体を、下風呂地先の試験地（通称たきの根）に放流した。なお、20mm、30mmサイズの各々997個体及び996個体に個体標識を貼付した。放流直後30mmサイズは転石の陰へ移動がみられたが、20mmサイズにはこのような活発なうごきはみられず、10mmサイズでは付着基質から落下する個体がみられた。放流貝は64年秋に回収し、生残、成長を調べる予定である。

試験地の生物環境を調べたところ、アワビは餌料効率の高いマコンブ群落付近には少なく、マクサ、アカハダ等の紅藻類が多い場所にみられた。これらアワビの生息場所と餌料の関係については今後の調査で検討する。